

# ケータイのリスクに対する高校生のエンパワーメント

— 学校臨床社会学的事例研究 —

Empowerment of High School Students  
against the Risk of Cellular Phone:  
A Case Study based on Clinical Sociology of the School

今 津 孝 次 郎

Kojiro IMAZU

省察的研究では、研究者と実践者は協働の様式に参加するようになる。…省察的研究は、実践者と研究者との相互のパートナーシップを必要とするのである。

—ドナルド・A・ショーン『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』

## 1. 「子どもとケータイ」問題

### (1) 「子どもとケータイ」認識の陥穽

「携帯電話」は近年の驚くほど急速な多機能化に伴い、すでに「移動電話」機能を超えているために、メディア・コミュニケーション時代に不可欠なツールとしての「ケータイ」というカタカナ表記が一般的に定着している。このケータイをめぐる最近、国をあげて大きく論議され始めたのが「子どもとケータイ」問題である。いうまでもなく、ケータイをめぐる有害サイトへの接続などを通じて犯罪に巻き込まれるケースが生じているほか、学校裏サイトなどでの誹謗中傷の書き込みによるいじめの多発、学校内持込による学校秩序の支障などが目立っているためである。

2008年5月、政府の教育再生懇談会は第一次報告の冒頭でケータイ問題を取り上げ、「必要のない限り小・中学生が携帯電話を持たないよう、保護者、学校関係者が協力する」と提言して以来、子どものケータイ規制が大きな論議を呼ぶこととなった。仮に持たせる

場合でも通話先は父母に限定せよとか、有害サイト情報から守るために閲覧制限のフィルタリングを強化すべきだとか、第一次報告には規制措置がいろいろと書かれている。このように、何かと規制して解決しようとする方法を外的な「規制主義」と名づけよう。しかも、こうした方針に沿う自治体のなかには、地域ぐるみで小・中学生がケータイを持たない運動を展開したり、条例化しているケースもあるほどである。ただし、子どものケータイに対するこうした規制主義的方策にはいくつかの陥穽がある。

1) 規制には小・中学校へ持ち込ませないという点と、小・中学生にはケータイそのものを所持させないという点に関わるが、前者は全国のほとんどの学校でそうした措置を以前から取っており、目新しくはない。問題は後者である。今やケータイの所持率は、全国平均で小学生3割、中学生6割、高校生9割に及ぶ。学校によったらそれより高い割合の場合もあるだろう。それこそ2000年代初頭な

らば、まだそこまで普及していなかったから、規制も意味があったかもしれない。しかし、今の実態では中学生の過半数が持っているほどだから、持つなと言われても生徒も保護者も当惑するだけである。すでに持っている兄や姉との関係はどうなるのか。持たせない運動をしている地域と多くが所持している周辺地域との関係はどうなるのか。つじつまの合わないことばかりである。

2) 規制の対象は小・中学生で、高校生についてはほとんど対象になっていない。義務教育段階では特別の教育的配慮が必要ということなのだろうが、中学生が高校生になったとたんケータイを所持する場合、身につけておくべきケータイに関する知識や技術・態度(後述する「メディア・リテラシー」)はそれまでにどのように準備されるのであろうか。つまり、「規制主義」は教育的配慮のように見えて、実は真の教育になりえていないのではないか。

3) フィルタリングによる規制が当然のように主張されているが、フィルタリングは万能ではないことがどれだけ認識されているか。フィルタリングは有害サイトへの接続を遮断する措置で、「青少年ネット規制法」(2008年6月参院本会議で可決・成立)によりこの措置が携帯電話会社に義務付けられた。18歳未満の青少年の場合、保護者が不要と申告しないかぎり、自動的にフィルタリングサービス運用に加入することになった。

フィルタリングには、携帯電話会社が健全と認定した公式サイトだけを見られるようにした「ホワイトリスト方式」と、第三者機関が有害と判断したサイトを見られなくする「ブラックリスト方式」の二種類に大きく分けられる。前者の場合、認定公式サイトしか見られないため、それ以外の必要なサイトへはアクセスできなくなる。後者の場合、有害

サイトは次々登場するからすべて遮断できるわけではない。また、フィルタリングをくぐり抜けて有害サイトに接近するひそかな検索方法もあるようだから、この方式でも万全とはいえない。しかも、より強いフィルタリングをかければ、有害ではないサイトまで遮断してしまって、言論・表現の自由を保障できなくなる。要するに、フィルタリングは新たな支障を伴うから万全ではないし、フィルタリングで有害サイト問題がすべて解決するわけではない。

4) ケータイのGPS機能(Global Positioning System 全地球測位システム)の限界についても触れておかねばならない。この機能は、人工衛星が発する電波を使って位置確認するシステムで、特に小学生の場合などは保護者がこの機能を求めていることが多い。しかし、人工衛星の電波が届かない地下ではGPS機能は使えないし、高層ビルの陰で電波が届きにくいところでも正確な位置測定ができないことがある。またGPS測定には誤差があるので、必ずしも正確な場所が示されるわけではない。にもかかわらず、「ケータイを持てば安全」と思い込んでいるのはなぜだろうか。最新のメカに弱い保護者がメカについての詳しい知識を仕入れること無く、漫然とその効用を信じ込んでしまうという、一種のケータイ“信仰”に陥っているせいである。器械はあくまで人間の生活を円滑にする便利な道具(ツール)でしかなく、器械の長所・短所といった特徴を正しく理解して、その器械をどう使いこなすのかを習得することこそ重要なのに、器械にただ頼ればすべてうまくいく、といった誤った観念に囚われてしまっている。

いずれにしても、ケータイというまったく新しいメディアの登場とケータイが子どもに悪影響を及ぼしている事態を目の前にして、

自らの子どもも時代にケータイを経験してこなかった大人世代がうろたえ、対処法さえ分からず、咄嗟に対症療法的に取った措置が「規制主義」であると言ってよいだろう。とはいえ、それはケータイに限らず、これまで新しいメディアが登場するたびに取られた措置でもあった。映画であれ、テレビ、パソコンであれ、いずれも登場した当初には子どもたちに対して何らかの「規制主義」がはたらいてきた。ケータイについても同様の応急措置的作用が生じているのだろう。

## (2) ケータイをめぐる「自己規律主義」とエンパワーメント

このところ、「子どもとケータイ」に関する書籍が次々と出版されている。例えば、藤川 (2008)、加藤・加藤 (2008)、尾木 (2009) などである。それらの内容には「規制主義」では問題解決できないという主張が織り込まれているものの、他方では共通して二つの弱点がある。

㊦ケータイそのものの実態とそのリスクに注目し過ぎ、人間世界のコミュニケーションの視点からのケータイの位置づけがなされていない。

㊧大人の立場からの議論であり、当事者である子どもの視点が反映されていない。

そこで、これら二つの弱点を克服するためにも、外的な「規制主義」に対抗して、内的な「自己規律主義」という立場を提起したい。

「自己規律主義」とは、あくまで高いケータイ所持率という現実から出発し、ケータイとどうつき合えばよいのかを一度根本から検討して、子どもと保護者自身が賢明にケータイを使用できるよう、正しい知識と技術、態度を身につけるべきである、という考え方である。外からルールを一方的に押し付けるのではなくて、子どもの内に自らのルールを確

立するという意味であり、保護者と教員はその確立の手助けをする任務があるという判断に立つ。今のケータイの状況では、「規制主義」よりも「自己規律主義」が要請されていると考える。もちろん、ケータイ所持と、学校にケータイを持ち込むこととは別の問題である。全国の小・中学校ではほとんどの場合、学校に原則持ち込んではいけないことになっている。それには重要な理由があるのだが、実は学校も保護者もその理由を十分理解してはいないことを後で指摘したい。

「自己規律主義」の確立は、心理学の「内発的動機づけ」の概念とも重なっているし、生徒自身が自らおこなうケータイに関する「メディア・リテラシー学習」にも連なっている。つまり、機械化された情報媒体であるメディアの仕組みや機能に関する知識と技能の学習である。

また、それは高校生が新しいケータイ・メディアを前にして、器械に操られるのではなく、自分たちが主人公になって器械をコントロールできるようにエンパワー (empower) することに他ならない。アメリカでいじめや暴力を無くして学校安全を推進するための新たなプログラム作成に取り組むフィリップスら (Phillips et al. 2008, chap.4) は、外側から内を規制する方法 (the outside-in approach) ではなく、内側から外に向けて規律づける方法 (the inside-out approach) の有効性を説き、生徒主体に着目することが学校安全を成功させる道であると論じた。それは「生徒中心の解決」 (student-centered solutions) であり、「規範」 (norms) を創造し、維持し、改訂していくのは生徒自身であるという基本的考え方である。そして、生徒をエンパワーする仕組みが1章分にわたって説明されている (chap.6)。エンパワーするとは教師や地域の大人たちの意思決定過程に生徒

が参加することであるが、参加のすべての責任が生徒に求められるのではなく、大人たちのガイダンスとサポートはやはり必要とされるのである。こうしたフィリップスらによる学校安全推進の手法の基本的考え方は、ケータイに対する生徒のエンパワーメントの議論とも一致する。

一般に「エンパワーメント」(empowerment)とは、久木田(1998)によれば、1950～60年代の公民権運動や1970年代のフェミニズム運動を契機として、世界の弱者の自立と保護、政治的権力による抑圧や経済的な搾取からの人々の解放などの活動を通して練り上げられてきた幅広い概念である。その中心的意味は人間の潜在的能力の発現であり、教育がもっともエンパワーメントを促進する活動である。一方、森田(1998, 18～21頁)はパワーが持つ二つの要素に着目している。肯定的パワーとして知識・経験・技術・自己決定・選択の自由・信頼など、否定的パワーとして暴力・抑圧・権力・支配・いじめ・虐待などである。そこで、エンパワーメントとは、否定的パワーに対抗して肯定的パワーを発揮させ、人々の心を深く侵食している無力感と闘うことにほかならない。

そこで、ケータイをめぐる「教師中心」(teacher-centered)でなく「生徒中心」(student-centered)のエンパワーメント文化が学校内で生まれる様子に関して、金城学院高校での学校臨床社会学的介入事例から検討してみたい。その前に、ケータイのリスクとメディア・コミュニケーション時代におけるケータイの諸特徴について整理しておこう。いずれもケータイの「メディア・リテラシー学習」にとって基礎的な知識である。

### (3) 青少年とケータイのリスク

最近よく目にするようになった「リスク」

という言葉は「危険」の意味であるが、危険そのものとは違う。「危険」(danger)が脅威の現実であり、危害を及ぼしている対象と恐怖の心理で表示されるのに対し、「リスク」(risk)は利益を望みながらも、そのなかで被るかもしれない危害や損失の確率である。たとえば、原発のリスクとか、株のリスクというように使われる。「危険」は取り除くことができるが、「リスク」は確率をゼロにすることはできない。ただし、リスクをゼロに近づけることは可能であると考えられる。リスクについて正しく認識し、リスクをできるだけ回避する管理が「リスク・マネジメント」(risk management)である。したがって、現代生活に不可欠なツールであるケータイに伴う危険性はリスクとして位置づけることができる。そこで、ケータイのリスクについて考えてみよう。リスク一般と、とりわけ子どもにとってのリスクとを合わせ、X～Zの三つに分類して列挙する。この分類は、より身近で観察しやすいリスクから、より奥深く観察しにくいリスクへという配列である〔このケータイ・リスク分類論は、今津(2008)を踏まえて、今津(2009a)が金城学院中学校の2008年度PTA総会時に保護者に向けて話した概要である〕。

#### ①リスクX(日常的トラブル)

日常的に起こりやすい故障や電池切れ、コスト負担高、そして紛失や盗難のリスクである。あまりに身近過ぎるせいか論じられることが少ないが、多機能の器械はいったんトラブルになると単一機能のものよりも不便性が大きい。しかも、紛失と盗難では個人情報(所持者の情報だけでなく、家族や友人すべての個人情報)が盗まれるという犯罪に結びつきやすい点に特に注意したい。子どもたちは個人情報が盗まれるリスクがあるということにまで思い至らないだけに、メディア・コ



コミュニケーション時代には情報管理という新たな自衛策が不可欠である点の新たな学習が要求される。

その他の日常的リスクとしては、コスト負担高が挙げられる。ケータイの料金体系は次の四つからなっている。①基本使用料②音声通話料③パケット代（メール・ウェブ・ダウンロード）④情報（着メロ・占いなどサービスサイト使用料）。

大人を含めたすべてのケータイ利用者では①～④合計でおよそ月平均7,000円が利用料金だと言われている。しかし、とくに③パケット代は利用しただけではかさむことになる（パケット定額制というサービスもあるが）。たとえば、「着メロ」はまだしも「着うた」1曲をダウンロードすると、最大3,000円以上の料金がかかる。楽しい、面白いからと次々利用しているとそのコスト負担は何万円もかかる大変なものになる。しかも、利用に関する何らのルールも家庭内で決められておらず、支払いはすべて保護者廻しになっていると、子どもは好き勝手に使ってしまうことがある。そこで、使用料引き落とし口座は子ども自身のものでつくり、お小遣いもそのなかに含ませるようにするとか（子どもの金銭教育・消費者教育になる）、仮に保護者口座と一緒にするにしても、使用料は月いくらまでと決めるとか、保護者の金銭管理が不可欠である。ところが、月4～5万円もの使用料が払われていながら、保護者がまったく知らなかったという中学生の事例などは決して珍しくない。今のような情報社会ではケータイは必要だと頭から思い込み、器械についてはあまり分からないからと、コストについて厳格に注意せず、管理責任者としての役目を果たさない保護者は多い。

#### ⑥リスクY（犯罪関連）

有害サイト（出会い系・アダルトなど）や

情報流出、迷惑電話＝メール（架空請求など）、そして「ケータイ・ネットいじめ」についてはマス・コミで広く報道されてよく知られるところとなった。子どもは好奇心旺盛であり、同時に社会の現実には無知であるから、怖いもの知らずに各種サイトなどのネット情報に無防備に接近しやすい。なるほど、フィルタリングをかけてアクセスできないようにする措置が取られたりしてはいるが、すでに述べたようにその実効性は弱いということも指摘されている。

それだけに、メディア・コミュニケーション時代では、危険（ではないかと予想されるような）な情報をすばやく察知して、アクセス回避する感性と行動力をどうやって培うか、という新たな教育課題を大人たちすべてが検討していくことが要請されている。昔は「人を見たらどろぼうと思え」ということわざ（生活の知恵）があった。村に入ってきた見知らぬ者は、どういう人間か分からないのだから、簡単に信用せず注意した方がよいという教えであったろうが、このことわざが人々を教育してきた。ところが、現代の“出会い系”サイトでは、どんな人間かも分からないのに、簡単に会って一緒に行動して、犯罪に巻き込まれる場合さえある。その際に、ことわざもなければ、教育課題さえ標榜されていない。

#### ◎リスクZ（コミュニケーション障碍）

リスクZはリスクX・Yと比べて隠されていて観察しにくく、ほとんど自覚できていないからこそ、そのリスクは深刻であると言える。まず、しばしば話題にされている「ケータイ依存症」を取り上げよう。

①ケータイ依存症。実はパソコンが登場したときにも「機械親和性」が問題視されたが、それと似ている。人間が機械のとりこになって人間の自律性を失い、一種の機械中毒症状

を呈する心の病気で、ケータイにも現れるようになった。長時間使用することにより、ケータイ無しでは生活できないとか、ケータイでやりとりしていないと不安である、などというようにメディア器械に支配された病的状態に陥るリスクである。また、深夜までケータイ・メールを繰り返しているうちに、睡眠リズムが乱れ、身体の失調をきたしている場合も少なからずある。

テレビが普及していった際にも「長時間視聴」(heavy viewer)が問題にされ、視聴時間を制限することが家庭教育課題のスローガンになった時期があった。注意すべきは、長時間視聴と低学力の問題である。各種調査の結果から明らかになったことは、毎日3時間以内の視聴と3時間以上の視聴とでは、前者と比べ後者の学力が低いという明らかな相違であった。ケータイの場合はまだ本格的な調査が行われてはいないが、同様の指摘ができるであろう。2時間という境目がしばしば指摘されている。つまり、メールであれネットであれ、一日計2時間以上のケータイ接触は2時間以内の場合と比べて学力が低いという仮説を立てることができる。

②ヒューマン・コミュニケーション学習の低下。さらに、より重要な点はヒューマン・コミュニケーションのスキルが磨かれないリスクである。次章で論じるように、人間のコミュニケーションの基本はヒューマン・コミュニケーションであるのに、メディア・コミュニケーションのスタイルがコミュニケーションだという錯覚に陥ると、ノンバーバル・コミュニケーションも含めて基本形態を学習することがおろそかになる。それは、ソーシャルスキルの習得を不十分なものにすだろろう。

学校にケータイを持ち込むことが原則禁止となっている理由としては、授業の支障となり、周囲に迷惑となり、学校秩序を乱すため、

と理解されている。しかし、本来の理由が論議されていない。第一に勉学への集中を失い、学力低下に陥る危険性があること、第二にヒューマン・コミュニケーションの訓練がおろそかになることである。この訓練は重要な発達段階である青年前期の中学・高校段階にこそ必要で、その後の社会生活の基礎が形作られるという点で大きな意義を持っている。

## 2. メディア・コミュニケーション時代とケータイの諸特徴

### (1) コミュニケーションの三類型

さて、ケータイだけに注目するのではなく、人類のコミュニケーション史というマクロの視点からケータイの特徴を位置づけておこう。人間のコミュニケーションには大きく分けて次のA～C三つのタイプがある(図1)。

#### A) ヒューマン・コミュニケーション

面接関係によるコミュニケーションで、人類の長い歴史はこのヒューマン・コミュニケーションである。人間同士の関係は深く、しかも多様である。友好・友愛・親愛・愛情関係もあれば、対立・競争・支配・憎悪・嫉妬などの関係もある。そして、後者のような対立葛藤関係を乗り越えようとする関係もある。良い意味でも、悪い意味でもヒューマン・コミュニケーションは実に幅広く、時代を超えてありのままの人間性を表出してきた。経験の乏しい若い世代は、そうしたありのままの人間性を体験的に知る必要がある。そして、どの関係が“善”であり、どの関係が“悪”であるかを学習し、“善”なる関係を求め、“悪”なる関係を克服していく能力と態度を培うことが要請されている。この基本的課題は、やはりヒューマン・コミュニケーションそのもののなかでしか達成することはできない。

面接関係を細かく観察すると、ノンバーバ

ル・コミュニケーションの比重の大きさに気づく。つまり言語 (verbal) を媒介にしないコミュニケーションのことで、視線や表情、身振り手振りを通した意志疎通や感情理解である。たとえば、深いお辞儀 (日本) や強い握手 (欧米) をすれば、言語を発しなくても (むしろ発しない方がより強く) 「こんにちは」や「ありがとう」などを意味する挨拶となる。しぐさで表す言語であるからボディ・ランゲージとも言われる。一般にヒューマン・コミュニケーションのうち6割はノンバーバルではないか、と言われるほどで、発語や文字以外の方法による人間の表現は実に豊かなものであることが分かる。

ところが、ケータイの表現は言語 (それに若干の絵文字や写真など。テレビ電話もあるが、普及していない) であり、ノンバーバルの部分が無く、コミュニケーションとしては貧しい表現しかできない。これがケータイの弱点であり主要な限界である。ケータイ・メールに文字で「(笑)」と添えられていても、それが「微笑」なのか「爆笑」なのか、あるいは「苦笑」なのか「冷笑」ないし「嘲笑」なのか、ヒューマン・コミュニケーションでは笑う表情のさまざまなニュアンスで理解できることがケータイでは分からない。しかも、絵文字で笑った顔が添えられていたにしても、それが本当かどうか分からない。真実の感情は泣いているか怒っているかもしれない。それどころか、20歳の女性を装ったメールを出会い系サイトに流す15歳の少女、同クラスの友人に成りすまして誹謗中傷メールをばらまき、その友人を学校内で苦境に立たせるといった“成りすましいじめ”など、虚偽メールが容易であるという点もケータイの深刻な問題性である。

そうした諸点からだけでも予測しうることは、ケータイに依存すればするほど、人間の

コミュニケーション能力が低下して貧弱になっていくだけでなく、コミュニケーション自体も歪んでいくという問題性を孕むことになる。ケータイ依存は人類が積み上げてきたヒューマン・コミュニケーションの財産を破壊しようとしているのではとさえ言いたくなる。

あるいは逆に捉えるなら、ヒューマン・コミュニケーションそのものの形態が現代社会のなかで大きく変わってきたので、ケータイによるコミュニケーションが求められているという見方も成り立つ。少子化のなかで濃密過ぎる親子関係や友人関係それぞれにとって、ケータイは距離を置くことのできるメディアでもある。そして他方ではその逆に、疎遠・切断・歪みといった貧しい人間関係のなかで、ケータイによる新たな関係を求めたいという欲求があるのかもしれない。そうだとすると、ケータイはあくまで便宜的な道具にすぎないわけで、中心はやはりヒューマン・コミュニケーションであることに変わりはない。

#### B) マス・コミュニケーション (マスコミ)

日本では19世紀後半に読売新聞や大阪朝日新聞、東京朝日新聞、大阪毎日新聞などいくつかの新聞が登場した。そして、20世紀初頭、東京放送局がラジオ放送を開始した。その後すぐ東京・大阪・名古屋の3局が合併してNHKが誕生している。さらに、東京テレビ局による本放送が始まったのは20世紀半ばである。このように日本では、新聞は140年ほど、ラジオは80年ほど、テレビは60年ほどの歴史があるが、時代の花形となったマスコミでも人類のコミュニケーション史のなかではほんのわずかな歩みでしかない。そしてまた、マスコミの特徴は印刷機器や放送機器というメディアによって不特定多数に多くの情報を一度に伝えるという新たな機械的コミュニケーションの始まりである。

ただし、このコミュニケーションは新聞社

やラジオ・テレビ局からの「一方向」的情報伝達という特質があり、それをどこまで読者や聴取者・視聴者との「双方向」的コミュニケーションへと換えていくかが大きな課題となった。そこで、新聞では読者の投稿欄を設け、ラジオでは聴取者と電話で結んだり、テレビではスタジオに視聴者が参加したりして「双方向」を少しでも実現してきた。2011年7月に切り替わるテレビの地上デジタル放送では、電波数が大幅に増えるので「双方向」がいくらかでも容易になり、長年の懸案事項が達成されると期待されている。

### C) メディア・コミュニケーション

1980年代からパソコン（パーソナル・コンピュータ）が普及し、通信・情報処理に革命が起こった。マスコミが大規模な組織的・一方向的コミュニケーションであるのに対して、インターネット化されたパソコンはメールにしてもホームページにしても双方向の個人的コミュニケーションを可能にしたのである。そして、1990年代後半からのケータイの加速的進化は、メディアによる双方向の個人的コミュニケーションをさらに決定的なものにした。しかも、パソコンやケータイはマスコミを取り込み始めた。つまり、新聞発行よりも早く最新の新聞ニュースをネットで読むことができ、今やケータイでもテレビを見ることができるようになった（ワンセグ）。もしかすると、大型液晶画面テレビ（ワンセグの対極！）も地上デジタル放送も、テレビをも取り込んだ新参のメディアに対する古参であるテレビ業界の生き残りを賭けた巻き返しなのかもしれない。

事実、若者が新聞「紙」を読まなくなっていることがすでに指摘されている。若い世代の“新聞（紙）離れ”をどう食い止めるかが、新聞各社に共通する密かな死活問題となっているほどである。極端に言えば、21世紀に入っ

て、Bマスコミの時代は終わり、Cメディア・コミュニケーションの時代へと突入したと言ってよい。たしかに、ヒューマン・コミュニケーションでは限られた人数同士が限られた時間と場所で交流するのに対して、メディア・コミュニケーションではそうした限界を乗り越えて、実に幅広いコミュニケーションをいつでもどこでも成し遂げる大いなる利便性を発揮する。とはいえ、パソコンやケータイの急速な普及のなかで、ヒューマン・コミュニケーションそのものは特に青少年の間で弱体化に向かいつつあるのではないか。

### (2) メディア・コミュニケーションとケータイの問題点

もちろん、そのように論じると、面と向かって言いにくいことでもケータイでメールを送ると伝えやすい、とケータイ擁護の反論があるだろう。実は同様のことは過去からあったことで、昔は手紙を書いたものである。「直接お会いしてお話すると言葉がうまく出ないので、お手紙にしたためます」といった書き出しが常套句であった。そのような場合でも、面接関係があくまで基本で、手紙は面接関係の延長上にくる補助手段であったと言える。ケータイの場合も同じく補助手段であり、ヒューマン・コミュニケーションに置き換わって、面接関係よりも上位のコミュニケーション形態にはなりえないはずだと考えるが、青少年の間ではケータイと面接の地位がかなり接近して、面接の地位が低下しているのではないかという危惧さえ覚えるのである。先に指摘したように、青年前期に豊かに習得されるべき「対人関係能力」（ソーシャルスキル）は、バーバルとノンバーバルの両面を含めた総合的力量であり、ヒューマン・コミュニケーションでこそ可能であろう。

「私は口下手なので、ケータイは便利だ」



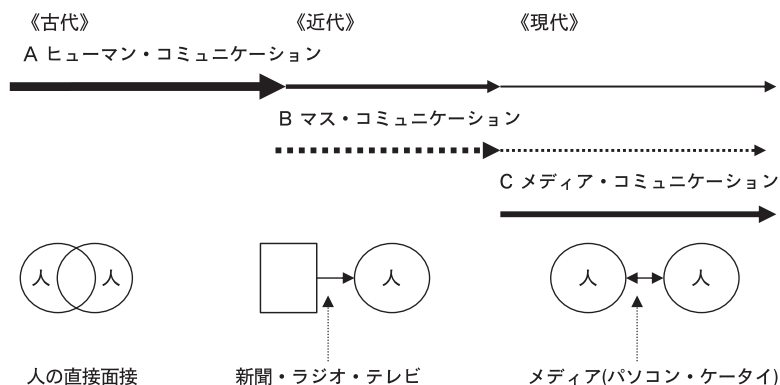
という生徒たちがいる。しかし、それでも可能なかぎり「口下手」を克服するように訓練を積むべきなのである。そうでないと、大学入試に面接がある場合には減点される。入社試験で試される重要な能力にはプレゼンテーションがあり、一瞬の間に自分独自の考え方を簡潔に要領よく、説得的に相手に話すことができるか、という能力が求められる。もちろん、ただ口が上手であれば評価が高いということではない。積極性や誠実さ、独自性が口も含め全身を通して伝わってくるかどうかが重要なのである。その際、ケータイ能力が問われることはない(パソコン能力は問われるであろう)。ケータイの利便性にただ依存していたら、自己表現を磨くことはできないことに留意すべきである。

図1で示した太い矢印は強力であることを、細い矢印は弱体であることを極端な形で示した(破線は一方向的性質を示す)。現代のコミュニケーション状況はAとBが弱体化し、Cの一人勝ちになっているのではないか。もし、そうだとすると、人間にとってそうした特徴は望ましいものであるのかどうか、が次に問われなければならない。なによりも、ケータイ進化の歴史はわずか10年余りであり、マスコミと比べてもほんの短期間でしかなく、

メディアとしての長所・短所はまだ十分に検討されてはいないのである。メディアはあくまで人間にとってコミュニケーション・ツールであるにすぎず、主体は人間である。しかし、メディアが主体で人間はその家来になり下がってはいないだろうか。また、コミュニケーションの原義は「意味の共有」であるのに、一方的・断片的な「情報伝達」に陥っているのではないか。それに、人類にとって、もっとも基本的なヒューマン・コミュニケーションが弱体化しているのではないか、など。

ケータイを所持する生徒たちの間で奇妙な掟が全国的に広がっている。メールが届いたら30分以内(学年や地域で相違があるようで、10分以内という場合もある)に返信しないと友だちと見なされない、という圧力である。生徒たちは煩わしく思いながらも、この30分(10分)メール返信の掟にいやおうなく従っているようである。これもケータイへの隷属以外の何物でもない。しかも、電話と比べたときのケータイの長所である「都合のよいときにメールを見て、都合のよいときに返信すればよい」という点から考えても実に奇妙である。相手の都合を大事にするはずのケータイが相手を拘束しているからである。そうすると、せっかくの長所が短所になってしまう

図1 コミュニケーションの三類型



ている。

そして、瞬時の返信というのは何を意味するか。もしかしたら、これはケータイを介した「擬似面接関係」が求められているのかもしれない。面接関係は瞬時の応答だからである。それだけケータイが面接を超えようとしているのではないか。しかし、面接関係での応答をケータイに求めているとしても、異なるコミュニケーション形態を混同した無理な要求というものだろう。本当の友人とは何かについて、少し立ち止まって考えればすぐに明らかなことなのに、ここでもケータイという器械に友人関係が引きずりまわされている。そこで、器械の主人公であるはずの青少年のパワーが抑圧され阻害されているから、かれらのエンパワーメントが必要になるのである。今広がっている「規制主義」はケータイが青少年にもたせている諸問題を覆い隠すことはできても、ケータイのリスクに対して青少年が身につけていくかもしれないパワーを封じ込めてしまい、かれらをエンパワーすることはできないであろう。

### 3. 学校臨床社会学的「介入」法

#### (1) 学校臨床社会学と「臨床」レベル

以上のような問題意識を念頭に置いて、ケータイのリスクに対する青少年のエンパワーメントを具体的に解明するために、2008年度に金城学院高校を舞台に一つの実践的介入を試みた。その介入方法についてまず説明しておきたい。「介入」(intervention)はコミュニティ心理学や人間発達研究、そして臨床社会学および学校臨床社会学にとって重要な方法であるが、ここでは学校臨床社会学(clinical sociology of the school)の観点から「介入」を位置づけておこう。なお、interventionは「調停」とか「仲裁」という意味合いなので、「お節介」を連想させる「介入」は

訳語として不適切であり、「インターベンション」というカタカナ語を使う方が良いとの意見もあるが、ここではすでに定着している「介入」をそのまま使用する。

すでに詳しく論じたように(今津, 2009b), 学校臨床社会学は新しい分野のように見えるが、その源流はデューイ『学校と社会』(Dewey 1900 [1915, 1990] 訳書1957, 1998)に行き着くと考えられる。19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ・シカゴでは急激な都市化、工業化によって地域社会は大きく変貌を遂げていた。1892年に創設されたシカゴ大学に1894年に赴任したデューイは1896年に15名の子どもを民家に集めて「実験室学校」(シカゴ大学附属小学校)を開設する。その後、子どもたちは40名、60名と増え、広い教室へと移転していったが、1903年まで続いたこの実験室学校の取り組みを踏まえて書かれた『学校と社会』は次のような特徴をもっていたと言えよう。

①社会のなかに学校を捉える基本的視点。  
②特定の(実験室)学校を基盤とする。  
③古いタイプの学校教育を改革しようとする実践的研究志向。  
④心理学による科学的人間発達の知見を重視。

もちろん、中心は④心理学の科学的知見によって子どもの発達過程を明らかにし、その過程に沿って小学校の学科課程を構成する点である。ただ、①社会的側面を核にして、②と③も含めて捉えなおすならば、『学校と社会』はある意味で学校臨床社会学の萌芽と言ってよい。『学校と社会』が書かれてから30年近く経って、社会学に大きな影響を与えたシカゴ学派は「臨床社会学」(clinical sociology)を開拓していく。学校臨床社会学は臨床社会学の方法を学校研究に応用したものであるが、学説史的に言えば、デューイの学校臨床社会学が臨床社会学に先行するとさえ言

える。

さて、学校臨床社会学における臨床の位置づけは、臨床社会学における臨床の位置づけと共通する。(学校)臨床社会学は生活秩序の大きな動揺として人々が深刻に感じる事象としての「社会問題」(social problems)を対象として、社会環境的観点から解明し、その解決方法を多角的に検討して、実践的方策立案に役立たせようとする。社会一般の場合は、虐待・DV・アルコール依存・自殺などが、学校の場合は、いじめ・不登校・非行・学級崩壊・校内暴力などが社会問題として取り上げられる。そして、それらの研究方法としては二つの流儀がある。

I 特定の社会問題について収集した諸資料を用いながら、社会学理論を駆使して解明することに力を置く研究。

II 特定の社会問題の解明だけでなく、その問題に実践的な社会的介入をおこなうことによって問題解決を目指すことに力を置く研究。

これら二つの流儀の分類軸を用いて、(学校)臨床社会学における「臨床」のレベルを分けることができよう。何よりも「介入」を伴うか否かが大きな分岐点になる。明らかに介入を伴うIIが臨床の度合いは強く、臨床レ

ベルが深いと言える。ただ、介入を伴わないIの場合についても「(社会問題の)病床に臨む」程度が弱い場合と強い場合を区別することができる。客観的・概括的に社会問題を全体的に解明するレベルと、具体的な社会問題を当事者に即しながら解明するレベルである。そうすると、(学校)臨床社会学における臨床レベルは表1に示すように、A・B・Cの三つに分類することができる。

臨床レベルAは、社会問題の社会学ないし社会病理学の対象や方法とほぼ等しく、それを現代的で人気のある「臨床」の表現を用いて刷新したものであるが、クライアントとの関係もあまりなく、介入も無い。社会問題は〔研究対象化〕されるだけである。

臨床レベルBは、社会問題の社会学のミクロな質的研究法だと言え、近年盛んな社会学分野であり、実践性とも結びついたので、大学院生の間でも人気がある。クライアントとの関係を形成し、個別の組織などに〔参加〕(participation)するかたちで観察やインタビューをおこない、エスノグラフィーにまで発展させる方法を探るが、本格的な介入までは至らない。

臨床レベルCは、介入プロセスを核にしたもっとも厳密な意味での臨床社会学である。

表1 (学校)臨床社会学における臨床レベル

臨床レベル	臨床の意味	主要な方法	介入
A	社会問題の一般的解明	統計資料分析 大量サンプリング によるアンケート	無 〔研究対象化〕
B	当事者に即した 個別社会問題の解明	参与観察 インタビュー エスノグラフィー	部分的 〔参加〕
C	当事者に即した 個別社会問題の解明と処方	協働関係に基づく 介入による問題解決	全面的 〔参画〕

クライアントとの協働関係を通じて、当該組織などが抱えた問題の解明と、解決のための介入プログラム策定とその実行、そして評価によってさらなる介入プログラムが必要かどうかの検討をおこなう。単なる〔参加〕でなく、より組織内部への〔参画〕(involvement)と言える。

言い換えると、A・Bレベルは広義の臨床社会学であり、Cレベルは狭義の臨床社会学である。もちろん、A・Bレベルの研究はCレベルの介入を強化し、Cレベルの介入はA・Bレベルの研究に新たな知見をもたらすから、臨床社会学は狭義と広義の全体が総合されて豊かになっていくものだろう。ケータイをめぐって、これまで1～2節で述べたのはAレベルに対応した内容であり、B・Cレベルに対応した議論を展開するのが後の4～5節の課題になってくる。

## (2) 学校臨床社会学の介入プロセス

それでは、改めて学校臨床社会学の性格を整理しよう。まず、学校という「病床に臨む」とはどういうことか。

「学校臨床」とは「学校での(個人)心理臨床」ではなくて、「学校(幼・小・中・高・大)現場が直面する具体的な諸問題で、教員を含む多くの人々が深刻に感じている問題を対象とし、その把握・解明・処方箋・介入とその評価に関する一連の検討」を指すものとして広く捉えたい。そして、「具体的な諸問題で、教員を含む多くの人々が深刻に感じている問題」とは、たとえば不登校・いじめ・学級崩壊・学力低下・非行・その他さまざまな問題が挙げられる。ケータイもそれらに追加されるべき新たな問題である。それらの問題行動を人々が深刻に受け止めるのは、そうした行動が生活秩序の大きな動揺を示すと感じるからであり、なかでも学校教員は解決へ

の強いニーズをもっている諸問題である。

また、そうした問題行動は園児・児童・生徒・学生諸個人の心身の異常を伴いがちであることもあって、臨床心理学や精神医学による個体的・病的アプローチが主流である。しかし、そうした行動が単に個体的問題に止まらず、個体を取り巻く学校組織環境をはじめ、社会環境、情報環境、さらには時代背景の強い影響を受けていることに注目するならば、様々な環境の諸要因との諸関連の検討を見落とすことはできないから、社会学的アプローチが不可欠である。

さて、レベルCの中核である介入については、杉井(2000)が臨床社会学者の役割として以下の三つの側面から捉えているが、そのまま学校臨床社会学の場合にも適用できる。

a クライアント (clients) : クライアントとは、介入によって何らかの問題状況の打開がはかられ、利益を被る人々である。したがって介入にとっては臨床社会学者とクライアントとの関係が重要である。クライアントのニーズは何か、介入プロセスをクライアントはどう受け止めているか、クライアントとの関係のなかで臨床社会学者に何らかの変容が生じたか。クライアントは個人からグループ、家族から組織、政府機関、政党、さらには国家社会まで多様である。

b 環境 (settings) : 環境は介入がおこなわれる社会環境のことで、学校、企業、政府機関、地域社会などさまざまである。

c 活動 (activities) : 臨床社会学者が独創的な想像力に基づいて、問題状況の解決に向けて実際におこなう行為である。単独でおこなうこともあれば、学際的チームを組んでのおこないもある。活動の狙いは治療というよりも、望まれる「変化」を起こすことで、そのターゲットは個人の内部、対人関係の行動、組織内役割関係、組織全体といったすべ



てを含む。

そして、介入プロセスは以下の四つの局面からなると、杉井(2000)は議論を続ける。

①問題状況のアセスメント：何が問題であるのかを社会的に理解すること。

②介入プログラム・デザイン：クライアントとの協働によってプログラムを作成し、合意に達すること。

③介入プログラムの実行：介入は臨床社会学者が一方的に変化を起こすことではなく、問題状況を解決するのはクライアントと臨床社会学者とのパートナーシップによってなされる活動である。

④介入プログラムの効果測定：介入過程で問題状況がどう変化したか、を常に評価し、必要ならば介入をさらに継続することも必要である。

このように、介入にとって重要なのは結果ではなく、そのプロセスのなかでクライアントとの相互作用により、問題状況にさまざまな変化が生じて、問題解決に向けて前進がはかられることである。そして、臨床社会学者の役割は、クライアントが自ら解決に向かうための選択をサポートすることである。

学校の場合に即して、方法的留意点を再確認しておこう。第一に、介入は問題の解明だけでなく問題解決や問題の再把握に有効に寄与しうる研究を目指すのが目的である。第二に、その介入を実現するために、研究者と学校教員との「協働」(collaboration)に努めることが肝要である。両者は「理論」と「実践」を単に役割分担するのではなく、「理論」と「実践」を相互に重ね合わせながら、ともに介入過程に参加するのである。この点は、ション(Schön 1983, 訳書2007, 340頁)が専門的職業の知識は専門的行為を省察する研究によってもたらされると論じた際に、「研究者と実践者は協働の様式に参加するよ

うになる」と指摘したことと重なる。

#### 4. 「生徒がつくるケータイ・ハンドブック」作成と生徒のエンパワーメント

##### (1) 学校臨床社会的介入のプロセス

金城学院高校での「生徒がつくるケータイ・ハンドブック」プロジェクト展開過程を、杉井(2000)が示した介入プロセスの四局面に沿いながら報告する。

##### ①問題状況のアセスメント

社会問題としての「子どもとケータイ」については第1節で述べた通りであるが、金城学院高校でのこの問題へのアプローチは、「子どもとケータイ」問題そのものからではなく、むしろ「いじめ」問題からであった。金城学院高校と中高一貫教育を展開する同中学校では、それまで反いじめの取組みを地道に推進していたが、教師主導の指導が壁にぶつかっていた。折しも、今津(2007)がイギリス教育省(Department for Education 1994, p.9)のいじめ防止マニュアルにあった「反いじめ全校政策」(whole-school policy against bullying)をヒントに「全校でつくる反いじめ憲章」(以下「憲章」と略記)策定を広く愛知県や岐阜県の学校関係者に対して提起していたところで、2007年5月に同中学校に呼ばれて全教員にそのプランを話した。つまり、学校ごとに全教員がいじめ問題の理解を深め、自校でのいじめの状況を把握し、いじめ克服の方策を立案して実践し評価するという当該学校自身の「スクールポリシー」を生徒・教師・保護者全体で確立することがいじめ問題の解決と予防にとって必要という考え方である。この「憲章」策定は職員会議でさっそく了承を得た。それから10ヶ月間、3年生の生徒会役員が中心となって、全校生徒で練り上げた7ヶ条に保護者が4ヶ条を加え、教師が「前文」を書いて、「憲章」案が

完成し、2008年3月にはいじめ問題を考える全校シンポジウムが開催されて、その席で「憲章」が制定された（中日新聞、2008年3月26日朝刊）。

この間の金城学院中学校への学校臨床社会的介入の記録は私立A中学校事例としてすでに詳細に述べたのでここでは繰り返さない（今津 2009b）。

本論文では「憲章」制定後に残った重要な宿題を取り上げる。それは、全国的にも今日のいじめが「ケータイ・ネットいじめ」（「ネットいじめ」と略される）の形態をとることが多いという事実をどう受け止めるかという課題である。「ケータイ・ネットいじめ」は英語でCyber Bullying（電脳空間のいじめ）と呼ばれ、アメリカでも大きな社会問題になっている（今津 2007, Kowalski et al. 2008）。もっともアメリカではパソコンを通じたいじめが多く、ケータイを通じたいじめが多い日本とは相違がある。そうであるなら余計に、ケータイに対する生徒自身の態度を検討する必要がある。ところが、それが深く検討もされず、ただケータイを規制するという措置が広がってしまっている。こうして、いかにして「ケータイ・ネットいじめ」を防止するか、という次の介入課題が浮かび上がった。

金城学院高校ではケータイは原則持込禁止である。ただ、ほとんどの生徒がケータイを所持し、通学範囲も広い関係でこの禁止措置が完全に守られているとは限らない。校舎内で音が鳴って教師に発見され、取り上げられるといったケースが無いわけではない。教師の方としても、持込禁止を保護者に伝える際に、その論理の説得性がもう一つ弱いということは何となく感じていたという状況もある。ここでも教師主導の指導に限界があった。ケータイの管理責任者は保護者であるのに、学校

で教師がその対応に苦慮しているという奇妙な事態は全国のほとんどの中・高校で共通していると言ってよい。

## ②介入プログラム・デザイン

中学校で「憲章」が制定される直前の2008年2月、今度は高校の教育相談に関する校内研修会に呼ばれ、「中高生とケータイのリスクメディア・コミュニケーションの視点からー」を話した（ほぼ同じ内容について、前述のように2008年5月には依頼されて金城学院中学校PTAを対象に講話した〔今津 2009a〕）。このなかで「高校生がつくるケータイ・ハンドブック」（以下、「ハンドブック」と略記）を提案した。この提案の目的は四つである。第一に「憲章」と同じく、生徒中心に生徒のエンパワーメントを実現するような取組みとすること。第二に大人によって書かれたケータイの危険性に関する本に対抗して生徒自身が冊子をまとめること。第三に生徒自身によるメディア・リテラシー学習の成果を盛り込むこと、である。これら三つを直接的目的とする新たなプロジェクトは教科「情報」にも密接に関わっており、また取組み方法は「総合的学習」とも重なり、高校でも馴染みやすいのではと思われたのである。そして、以上三つを通じて、ケータイに関する「自己規律主義」育成のモデルを全国的に発信することが第四の間接的な目的である。

このプロジェクトの趣旨について教員側に特に反対の声はなかったが、「憲章」と同じく先行例がなく、1年間にも及ぶ作業を具体的に思い浮かべることができないことから、誰（校務分掌）が担当するのかという点になると、生徒会担当なのか生徒指導担当なのかも判断できないまま、新年度に入ってから校内で具体的な動きは出なかった。開始の端緒となったのは、「憲章」作成を中学校で中心的に担った新1年生を高校がどう受け止め

るか、という課題意識を抱いた1年担任団である。新1年生は生徒中心の活動を1年間展開してきて、高校でもいじめ問題に関連するような何かの活動を継続したいと願っているだろうし、中学校からの意欲に応える受け皿を提供する必要があるのではないか、という実践課題意識である。1年担任の一人がまとめ役になり、学年として「ハンドブック」作成に取り組むことになった。全校の取組みとはならなかったが、校長の後押しもあり、1年生がやることだからと職員会議で最終的に了承された。1年担任団が担当することになったのは、「ハンドブック」作成に向けて動きだすための咄嗟の選択であったが、逆にその選択によって早期に着手でき、小回りがきいて全校で取り組むよりも円滑に活動が進められる結果とはなかった。

### ③介入プログラムの実行

4月の1年生の授業を通じて、「ハンドブック」作成有志を募ったところ、60名もの希望者が手を上げた。一クラス分の生徒数を上回り、1年生全体400名の15%である。20~30人くらいと予想していた倍ほどになり、生徒がケータイに寄せる関心の高さを再認識させられることになった。6月、その60人を対象に今津が「ケータイとのつき合い方—メディア・コミュニケーション時代と私たち—」を講話した。それは、これからの具体的な作成作業に向けての基調提案であり、特に力を入れたのはケータイを人類のコミュニケーション形態のなかに位置づけるという視点である。冒頭で指摘したように、大人によって書かれた最近のケータイ関連本の弱点である⑦を強調するとともに、①を引き出そうとする提案内容である。

この基調提案を受けて、配布された希望学習項目に沿いながら、生徒は興味関心に応じて選んだテーマごとに自主的に班を作った。

「ケータイいじめ」、「ケータイとコミュニケーション」、「ケータイ依存」、「ケータイとリスク」、「ネット犯罪」、「ケータイとネチケット」などのテーマに及び、2~3人の班から7~8人の班に至るまで計九つの班(計49人)ができあがった。この各班に1年担任の7人が指導教員団として相談にのることになった。中学3年時の「憲章」作成の延長という意味を込めて班全体は「反ネットいじめ研究会」と名づけられた。

主に夏休みとその前後の期間を利用しての各班の自主的調査作業は、指導教員団が驚くほど活発な取組みとなった。各班とも主にネットでさまざまな情報収集をおこなう他、ケータイの実態を調べるために1年生対象のアンケート実施した班や、ケータイ・ネットいじめを調べるために県警サイバー犯罪対策室を取材した班など、別に授業の成績になるわけでもないのに、熱心に調査作業が続いた。その様子は、ケータイに関する問題状況を打開していくのは生徒自身であることを予感させる取組みであった。

### ③・④介入プログラムの実行と効果測定

9月、指導教員団の助言によって、「反ネットいじめ研究会」内部の中間発表会が開かれた(今津は参加できなかった)。一グループ欠席で8班計44人が各班ごとに模造紙1~2枚に内容をまとめて互いの調査成果を報告し、ハンドブック全体の見通しを得ながら、追加資料として何が必要かの検討をおこなった。「反ネットいじめ研究会」全体としては、教員が予期した以上に諸資料が集められて充実した内容で、とりわけ「コミュニケーション」というやや抽象的でレベルの高い哲学的テーマへの関心の高さや、「ケータイ依存」がいくつかの班で共通して取り上げられるといった特徴が見られた。また、模造紙作品を9月の高校文化祭に持ち込んで発表した熱心な班

もあった。10月に入ると、調査・資料収集が再開されるとともに、7人の指導教員団が「ハンドブック」全体のストーリーを相互に検討しつつ、各班が発表内容の原稿化を進めるうえで助言をおこなった。

11月には、第2回中間発表会が開かれ、今度はパワーポイントによる本格的なプレゼンテーションとなった。全発表終了後の講評のなかで今津は、「内容のレベルといい、調査した情報量といい、またプレゼンテーションの出来具合といい、高1とはとうてい思えず、大学1年生のレベルである」と評価した。

その後集まった全原稿はパワーポイント内容部分も含めてA4判で合計130枚(400字詰では500枚程)にもなった。義務的な課題レポートでもないのに、平均して一人3枚(400字詰10枚)程度にもなり、まったく自主的に取り組んだ大きな成果である。プレゼンテーションであれ、原稿であれ、身近なメディア・ツールであるケータイに関する表現の機会が与えられたら、高校生は思いがけない力を発揮する。それこそ「規制主義」では高校生のエンパワーメントを実現することはできないことを物語る。しかも、大人によって書かれた類書と比べての特徴は、ケータイの短所や危険点をことさら強調するのではなく、短所と共にその長所やメリットについてもバランスよく指摘しているところである。

第2回中間発表会が終わってから1ヶ月後の12月、集まった原稿をもとに「ハンドブック」作成に向けた第1回編集会議を開く。この編集会議は研究者側がリードすることになった。この日は生徒20人余りと指導教員団4人が出席。司会は今津が担当し、編集協力者として今津研究室の大学院生も同席した。大学研究室が自主的に高校での教育実践をサポートする体制の具体化である。生徒執筆者は最終的に39人となった(部活が忙しいなどさま

ざまな理由で当初参加希望を出した60人のうち20人ほどが研究会を退会した)。生徒の各班は全体の目配りをしていないので、研究者側から以下のような編集方針を提案した。

①編集の手を加えるのはあくまでスタイルの統一に関わる点とし、内容は生徒の原稿をそのまま生かす。②「ハンドブック」は50頁くらいの小冊子を想定し、集まった原稿枚数があまりにも大部なので、章構成に沿いながら重なる部分や論旨から離れる内容や細かすぎるデータは思い切ってカットする。③読みやすくするためにQ&A形式にスタイルを統一する。④文献やサイトの出典を明記する。⑤「はじめに」は生徒が書き、「あとがき」には各班の一口感想を入れ、指導教員団代表、学年主任、校長、監修者、編集協力者のコメントを追記する。⑥余白には生徒が描いたカットを入れる。

以上の編集方針がそのまま受け入れられたが、カットだけでなく、表紙も手づくりのイラストにしたいとの希望が出された。可能なかぎり自分たちの手で作り上げたいという意欲の現われだと言える。そして、さっそく今津研究室では原稿の書式統一作業に入る。

年が明けた2009年2月に開かれた第2回(最終)編集会議では、「ハンドブック」の書式見本を提示して編集方針を具体的に確認した後、生徒は原稿の細部調整作業を班ごとにおこなう。「ハンドブック」表紙の色も色見本によりその場で決められる。印刷業者も会場に詰めていたが、高校生がこのように印刷物の編集にあたる現場を直接見たのが初めてだったこともあり、検討すべき事項が出てくると手の空いた生徒がすぐに集まってその場で結論を出すという取組みの熱意と手際よさにすっかり感心していた。

3月に予定されていた1年全生徒対象の「ハンドブック」発表会まで時間が無いとい



うこともあり、2月の印刷初校から3月にかけての2～3校作業は今津研究室で印刷業者を交えておこなった。「ハンドブック」印刷が完成したのは、学年全体発表会の前日3月11日であった。(表紙写真参照)



#### ④介入プログラムの効果測定

年度末の学校行事が詰まっている時期ではあったが、3月12日の午後75分間を割いて「ハンドブック」完成発表会が1年生全員400名に保護者と教員が参加して講堂で開かれた。壇上に並んだ作成生徒有志代表(五つの班から計10人)が「ハンドブック」の五つの章の骨子についてパワーポイントで手短かに紹介したあと、同じく壇上の保護者代表二人がコメントし、会場との全体討論をおこなった(コーディネーターは希望して今津が担当)。時間が残り少なく、教員一人と生徒一人がフロアから感想・意見を述べた。ケータイは高価で個人(所持者だけでなく家族・友人の)情報満載の私物であり、管理責任者は保護者であるから、生徒と保護者の対話こそ重要と考えての壇上配置である。

さて、介入プログラムの効果測定は、次のような諸点について実施されるべきであろう。「ハンドブック」によってケータイに対する

生徒の知識・態度・行動にいかなる変化が見られたか、ケータイ依存症の状態は解消されたか、ケータイのリスク・マネジメントへの関心が高まるとともに実際に行動に移せるようになったか、学校内原則持込禁止が完全に守られるようになったか、つまり、以上を総合して生徒のエンパワーメントが実現したか、そして「生徒中心」の学校文化が浸透したか、など。ただし、それらの測定は一定の時間経過を必要とする。そこで、ここでは会場で配布された簡単なアンケートの結果から(有効回答数398)、ハンドブックの評価についてのみ報告する。

その際、日常生活でどれくらいケータイと接しているかによって評価も異なるのではないかと判断し、毎日の使用時間を三つに区分して実態を調べたところ、「2時間まで」60.3% (n=240)、「4時間まで」21.4% (n=85)、「4時間以上」13.3% (n=53)、「まったく使用しない・ケータイを所持しない」3.8% (n=15)、「NA」1.3% (n=5)となった。1年生全体の6割以上が2時間までとなっている。すでに触れたように、ケータイ依存的問題性が出現しやすいのは2時間以上であるとしばしば指摘され、2時間が一つの区切りとされることが多い。2時間以上の使用は全体の3.5割で、4時間以上の使用者も1割を越している。そこで、生徒それぞれの使用時間ごとの評価を検討してみたい。

表2は「ハンドブック」全体の印象を有益性の点から尋ねた結果である。「[大変+少し]ためになる」という回答が全体の80.9%を占め、「あまりためにならない」は10.8%に過ぎず、生徒自身の手による「ハンドブック」は生徒に近いだけに役立っていることが分かる。ただ、細かく見ると三点を指摘できる。第一に「まったく使用しない+所持しない」15人の生徒にとっては「ためになる」回答

表2 「ハンドブック」の印象（有益性） [%値]

使用時間	有益性			NA	N
	大変ためになる	少しためになる	あまりためにならない		
2時間まで	31.3	55.0	7.5	6.3	240
4時間まで	31.8	49.4	8.2	10.6	85
4時間以上	26.4	39.6	22.6	11.3	53
使用(所持)しない	33.3	13.3	33.3	20.0	15
NA	40.0	40.0	20.0	0.0	5
計	30.9	50.0	10.8	8.3	398

(7人)と「ためにならない」回答(5人)が分かれたこと。第二に「4時間以上使用」53人の生徒も「ためになる」回答(35人)と「ためにならない」回答(12人)が分かれたこと。第三に2時間未満の生徒240人のなかでも割合は小さいにしても実数では18人が「ためにならない」と答えていること、である。

こうした「ためにならない」回答の理由は何であろうか。あくまで推測の域を出ないが、①ケータイそのもの又はケータイに関する議論にあまり関心がない、②ケータイについての議論はすでに承知していると感じている、③ケータイと一体化していて、器械を相対化する発想を取れない、という立場が考えられる。①は使用しないか所持しない場合に、②はどのような使用時間の場合でも、③は長時間使用の場合にそれぞれ出現しやすい立場ではないかと考えられる。

そこで、エンパワーメントの観点からすれば、こうした「ためにならない」回答をする生徒のケースをさらに追究していく必要がある。なかでも③ケータイと一体化していて、器械を相対化する発想を取れない場合を想定すると、このケースは検討の余地が大きい。なぜなら、もっともエンパワーメントが要請

される生徒たちではないかと思われるからである。このケースだと「ハンドブック」を読むだけでは効果は無く、後で触れるようなピア・コーチングによってさらに詳細に教え合わないとエンパワーメントが実現しないかもしれない。あるいは、もしかするとこのケースは「ハンドブック」作成プロジェクト自体を受け入れることができない生徒たちかもしれない。特に長時間使用になると依存傾向が強くなりがちだから、「自己規律主義」が通用しないかもしれない、「規制主義」で使用時間を限定することの方が先決かもしれないのである。

さて、次は「ハンドブック」の内容への関心についてである。特に関心を強く持った章を第1～3位の順に挙げてもらったところ(1位×3点、2位×2点、3位×1点で加算)、全体では①「ケータイ依存症」(25.8%)②「ケータイの所持・使用の実態」(16.5%)③「ケータイ・ネットいじめ」(13.5%)④「ケータイの多機能的魅力と落とし穴」(10.9%)⑤「コミュニケーションとメディアから見たケータイの長所と短所」(10.6%)⑥「ケータイとネットのネチケット」(7.9%)⑦「ケータイ・ネットのリスク」(5.8%)となった。「ケータイ依存症」や

「ケータイの所持・使用の実態」を選んだ割合が高いということは、日頃からケータイに慣れ親しんでいるとしても、自分は「ケータイ依存症」ではないのか、あるいは自分の使用の仕方はみんなの使い方と比べてどうなのか、といった疑問や不安感がどこかに潜んでいることの実情かもしれない。今の生徒たちはケータイとのつきあい方について、これでよいのだろうかという疑いを持ち、それを解決したいというニーズをそれとなく秘めているのではないだろうか。

第1～3位を合計した全体の割合の順位とほぼ同様であり、しかも関心ある章の割合が全体結果よりも端的に表れている第1位の結果のみを抜き出して、使用時間別とクロス集計したのが表3である。使用時間が長くなるほど「ケータイ依存症」への関心が高まっていることは、生徒は単に“ケータイ漬け”になっているのではなく、どこかでケータイとのつきあい方について密かに疑問を抱いていることを物語っている。その疑問を実際に明らかにし、その疑問と対話することができれば、困難と見られる生徒たちのエンパワーメントにも成功しうるのでないだろうか。

## 5. 「生徒中心」学校文化の創造

### (1) 学校臨床社会学的介入の意味

以上、介入プロセスを詳細に報告してきたことから分かるように、学校臨床社会学的介入法というのは、研究者の問題関心と枠組みを用いて学校現場を調査する方法でもなければ、研究者が構築した理論や実践プログラムを現場に適用して検証する方法でもなく、学校現場から要請されて、教育実践の助言をする方法でもない。そうではなくて、以下のような発想による新しい手法である。

- ⑦何よりも学校のなかに解決を迫られている問題（ケータイ）があり、
- ⑧学校は一定の取り組みをしているのに（教師主導による生徒指導）、問題解決には至らず思案している状況があるなかで、
- ⑨研究者がそうした状況の存在を知り、
- ⑩一定の解決方法プラン（「生徒中心」による「ケータイ・ハンドブック」作成）を学校に提示して基本的了解を得て、学校と協働してそのプランの具体的実現を互いに工夫し、
- ⑪実現過程で発見したこと（生徒の現実）を学校は実践計画の中に、研究者は研究計画のなかに取り込んでいきながら、解決方法プランをさらに練り上げていくこと。

表3 「ハンドブック」で特に興味を持った章（第1位）

興味 使用時間	〔%値〕								
	実態	長所と 短所	魅力と 落とし穴	依存症	いじめ	リスク	ネチケット	NA	N
2時間まで	20.4	9.6	8.8	32.1	8.8	4.6	9.2	6.7	240
4時間まで	22.4	7.1	7.1	37.6	12.9	1.2	5.9	5.9	85
4時間以上	17.0	1.9	5.7	43.4	5.7	0.0	7.5	18.9	53
使用(所持)しない	26.7	6.7	6.7	26.7	13.3	0.0	6.7	13.3	15
NA	0.0	20.0	20.0	40.0	20.0	0.0	0.0	0.0	5
計	20.4	8.0	8.0	34.7	9.5	3.0	8.0	8.3	398

こうした新たな手法を取ることによって得られるメリットは、第一に学校のありのままの現実を学校現場に即しながらできるだけ客観的に解明しうることで、研究者にとっても教員にとっても新たな発見が期待できること。第二に単なる解明だけでなく、問題解決の実践方法を開発しうること。第三に研究者と学校の協働的連携関係を推進することができること、である。

そして、今回の事例研究で得られた最大の収穫は、「学校のありのままの現実」のうち、生徒の自主活動が予想以上に結実していった事実から判断される生徒の潜在的能力の存在であり、「規制主義」(the outside-in approach)ではなく「自己規律主義」(the inside-out approach)の方法をとれば、その潜在的能力が思いがけず大きく開花し、それが生徒のエンパワーメントになるであろうという見通しである。そして、その一方では、「自己規律主義」の受容が困難であると判断される生徒たちの存在も予想されたことである。そうした少数の生徒たちに対してはさらなる取り組みが工夫される必要がある。

学校は基本的に「教師中心」の文化から成り立つ。しかし、生徒のさまざまな学習と発達が「教師中心」によって完全に実現するかという決してそうではなくて、「生徒中心」の文化を織り込みながら二つの文化が相乗作用を果たすことによって成功するのだと考えることができる。とりわけ高校という発達段階やケータイというほとんどの生徒が所持している私物を問題として取り上げる場合は、「生徒中心」文化をどう育てるかという課題意識こそが大切であり、大人による「規制主義」では成功しないであろう。今回の学校臨床社会学的介入もこれら二つの文化をあぶり出すことが大きな目的であった。研究者の立場から介入したことは、生徒自身による「ハ

ンドブック」作成という実践課題の着想を高校に持ち込んだことであり、その実現に向けては生徒自身による予想以上の取り組みが大きかった。そしてその過程では常に指導教員団による背後からの支援があった。「ハンドブック」の印刷編集過程ではスタイルの統一で大学研究室が介入をしたけれども、生徒による大部の原稿が意欲的で充実していたからこそできたことで、プロジェクトが推進されたのはあくまで生徒の根気強い実行力の成果にほかならなかった。

## (2) 生徒のエンパワーメントに向けた諸課題

「ハンドブック」が完成すると、2009年度に向けてさっそく次なる実践課題がいくつか浮かび上がってきた。ここでは課題の概要だけを記しておこう。

①他の学年にどのように「ハンドブック」の内容を伝えていくか。②「ハンドブック」を基に生徒と保護者との対話をどう推進していくか。③ケータイの進化が著しいだけに「ハンドブック」の改訂版をどう編集していくか。

①について。まず、2009年度新1年生に「ハンドブック」を配布して新2年生(1年生有志作成者)がオリエンテーションをおこなうという企画を考案できる。実はこの企画は、「ハンドブック」印刷部数を決める際に指導教員団と議論して、新1年生分も印刷部数に含めてあった。そして、そのオリエンテーションは、仲間同士で教えあうピア・コーチング(peer coaching)の手法であり、「自己規律主義」を一層推し進め、ひいては「生徒中心」文化をさらに育成する方法ともなりうるものである。同じように、新3年生にもどう広めていくかを検討する。

②について。文科省も「ケータイについて



家庭で親と話し合うように」と呼びかけてはいるが、実際にはメカに弱い保護者がどれだけ高校生と話し合うことができるかはきわめて疑問である。それだけに、「ハンドブック」は互いに話し合うきっかけとして格好の具体的な素材になりうる。たしかに、3月12日に開かれた「ハンドブック」完成発表会で、生徒と保護者が壇上で簡単なやりとりをしたが、ごく短い時間で中途半端に終わったので、今後PTA内で保護者自身の懇談会を「ハンドブック」の輪読会という形式で持ったり、生徒との座談会を独立して開いたりして、話し合いの機会を数多く作り出す工夫が求められる。

③について。新2年生の「ハンドブック」作成経験者と新1年生の未経験者とが共同して、新たな調査研究活動を展開し、「ハンドブック」第2版の準備を積み重ねていくことが、生徒のエンパワーメントをより広くより奥深く確実なものしていく一つの手堅い方法であろう。

最後に、金城学院高校内の課題を超えた広い目標を④として追加して挙げておきたい。

④それは、「ハンドブック」作成プログラムは、他の高校にも適用しうる生徒のエンパワーメントの具体的手法であり、さまざまな高校で取組むことが期待される。しかも、ケータイをめぐる生徒の現実、私立女子校と公立の男女共学高校では共通点があれば細かな相違点もあるだろうから、そうした公立高校でもこの手法を用いてケータイについて調べるのも学校臨床社会学的研究上の興味深い課題である。

#### 【文献】

Department for Education 1994, *Bullying: Don't Suffer in Silence—An anti bullying pack for schools* (=1996池弘子・香川知晶訳『いじめ、

ひとりで苦しめないで—学校のためのいじめ防止マニュアル—』東信堂)

Dewey, J. 1900 [1915, 1990], *The School and Society*, The University of Chicago Press (=1957 宮原誠一訳『学校と社会』岩波文庫, =1998 市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社学術文庫 [ Philip Jackson 編集による1990年版 ] )

藤川大祐 2008, 『ケータイ世界の子どもたち』講談社現代新書

今津孝次郎 2007, 『増補 いじめ問題の発生・展開と今後の課題』黎明書房

————— 2008, 「子どもとケータイのリスク」『消費者情報』389号, 財団法人関西消費者協会  
————— 2009a, 「ケータイとのつきあい方—メディア・コミュニケーション時代と私たち—」『葦』60号, 金城学院中学校

————— 2009b, 「学校臨床社会学の構想」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第55巻第2号

加藤寛子・加藤良平 2008, 『ケータイ不安』NHK出版

Kowalski, R.M. Limber, S.P. & Agatston, P.W. 2008, *Cyber Bullying*, Blackwell

久木田 純 1998, 「エンパワーメントとは何か」

久木田 純・渡辺文夫編『エンパワーメント—人間尊重社会の新しいパラダイム—』〔現代のエスプリ376〕至文堂

森田ゆり 1998, 『エンパワーメントと人権』解放出版社

尾木直樹 2008, 『「ケータイ時代」を生きるきみへ』岩波ジュニア新書

Phillips, R., Linney, J. & Pack, C. 2008, *Safe School Ambassadors: Harnessing Student Power to Stop Bullying and Violence*, Jossey-Bass

Schön, D.A. 1983, *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*, Basic Books (=2007 柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』鳳書房)

杉井潤子 2000, 「臨床社会学における『介入』」  
畠中宗一編『臨床社会学の展開』〔現代のエスプリ393〕至文堂, 平成12年4月号

【資料】

金城学院高校1年生有志『高校生がつくるケータイ・ハンドブック』第1版（2009年3月）

—内容（目次）—

はじめに（生徒有志による作成の経緯）

I ケータイの所持・使用の実態

- Q I - 1 どれくらいの人がケータイを持っているんだろう？
- Q I - 2 みんなケータイにどれくらいお金と時間をつかっているのかな？
- Q I - 3 迷惑メール・出会い系サイトからケータイは身を守ってくれるよね？

◇コラム ケータイ

II コミュニケーションとメディアから見たケータイの長所と短所

- Q II - 1 私たちがいつもしてるものだって言われるけど，“コミュニケーション”ってそもそも何？
- Q II - 2 私たちはどうやってコミュニケーションしてるのかな？話す以外にもコミュニケーションしてるの？
- Q II - 3 友達とメールしたり，チャットしたりするのは，コミュニケーションって言わないの？
- Q II - 4 私たちがよくつかうケータイも悪い点があるの？ケータイの良い点と悪い点を教えて。
- Q II - 5 ケータイでもつかえるインターネットって便利だけど，知ってるようであんまり知らないかも。インターネットってどんなもの？

◇コラム メディア

III ケータイの多機能的魅力と落とし穴

- Q III - 1 ケータイの機能を確認したいな。
- Q III - 2 みんなが一番使うメール。すごく便利だけど，トラブルになることはないの？
- Q III - 3 プロフで友達つくれるっていう話だけど，危ないことはないの？
- Q III - 4 私たちの間でもネット掲示板をつかっ

てる友達がいる，トラブルがあるって聞いたことがあるんだけど…。

- Q III - 5 チャットって楽しそうよね。やってみたくないって思ってるんだけど，どんな長所や短所があるんだろう？

◇コラム GPS

IV ケータイ依存症

- Q IV - 1 私って…もしかしてケータイ依存症？
- Q IV - 2 ケータイ依存症って，なんでなっちゃうの？
- Q IV - 3 依存してるわけじゃないと思うけど，メールがこないと不安になることはあるんだよね…。
- Q IV - 4 ケータイ依存症かどうか，自分で調べられる？

◇コラム 依存症

V ケータイ・ネットいじめ

- Q V - 1 最近，新聞やテレビでケータイとかを使ったネットいじめがあるって言うけど，どんなことが「ネットいじめ」になるんだろう？
- Q V - 2 ネットいじめって，具体的にどんなことされちゃうのかな？
- Q V - 3 ネットいじめをなくしていくにはどうすればいいんだろう？

◇コラム いじめ

VI ケータイ・ネットのリスク

- Q VI - 1 ケータイやネットを使っていると，“セキュリティ”という言葉を見かけるけど，実はなんのことかよくわからないんだ。
- Q VI - 2 ネットで誹謗中傷されちゃったり，個人情報を勝手に書き込まれちゃったりしたら，どうしよう？
- Q VI - 3 出会い系サイトって私たちに関係あるの？
- Q VI - 4 最近，ニュースとかで聞く「学校裏サイト」ってなに？
- Q VI - 5 歩きながら，ついついケータイ使っちゃうんだけど，車の運転してるわけじゃないし，別にいいよね？
- Q VI - 6 ケータイどこかでなくしちゃった!!

新しいケータイ買うつもりだけど、  
なくしたケータイが危険だって聞いた  
気もする？

◇コラム リスク

## VII ケータイとネットのネチケット

QVII - 1 ケータイやネットを使うときに、ネチケットが大切なのは知ってるけど、具体的にどうすればいいの？

QVII - 2 ネチケットはわかったけど、でもやっぱり面倒くさいかも…。

◇コラム ネチケット

**あとがき**（執筆した生徒有志班の感想，指導教員  
団代表・学年主任・校長の感想，監修  
者・編集協力者の感想）

### 【付 記】

学校臨床社会的介入の機会を与えていただいた金城学院高校構成員の皆さんに深く感謝します。